

## ジャーナリスト・政界の裏方・修史家としての三つの顔

昨年は徳富蘇峰生誕150年にあたり、生まれ故郷の熊本県水俣市や熊本市では記念行事が行われました。今日は徳富蘇峰という人物をご紹介します。彼は生涯を再検討しようと思います。彼は生涯において三つ、大きな仕事をしました。一つはジャーナリスト、出版人。二つ目は政界の黒幕としての世論操作。三つ目は修史家としての活動でした。

まず一つ目、出発点の蘇峰は、社会改造を志すベンチャー起業家でした。彼は同志社英学校を中退後、熊本に帰郷し、日本社会を変えようと大江義塾を作ります。そこで青年たちに話した内容をまとめて明治18（1885）年に私家出版した本が東京の知識人の間で評判になり、後に改題して出版したのが『新日本之青年』です。

前年には『将来之日本』を出版しました。初期の代表作です。自信を得た彼は塾をたたんで上京し、次に国民一般を対象にした社会教育を目論んで発行したのが『国民之友』という雑誌です。さらに

持ちました。日露戦争後ポーツマス講和条約で国民が、賠償金を取らなかったことに抗議して日比谷焼き討ち事件を起こした時、国民新聞社も焼き討ちに遭いました。第3次桂内閣の「大正の政変」の時も、国民新聞は内閣を代弁する立場を取ったため、二度目の焼き討ちに遭いました。

桂太郎の死を機に蘇峰は政界から身を引き、文筆活動中心に戻りますが、昭和に入り、東條英機内閣の時に、政権の黒幕に回ります。その影響力は、大東亜戦争開戦の詔書に筆を入れるほどのものでした。

蘇峰は何を目的に政界と関わったのか。桂内閣の時は、新聞人として桂を動かそうとしたのだと言えます。東條内閣についても「私は東條を教育してやろう」と思っていた。他の人は東條を敵とした。私は東條を正しく導いたら役に立つと思った」と言っています。

三つ目の顔は歴史家、修史家です。一番の業績は『近世日本国民史』全100巻を書き上げたことです。中絶を含み、大正6（1918）年から昭和27（1952）年までかかっています。近衛家、



伊藤 彦 氏  
同志社大学名誉教授

## レクチャー

Doshisha Spirit Week 2014春

# 徳富蘇峰と新島襄 —蘇峰再評価の動きの中で—

伊藤 彦 氏  
同志社大学名誉教授

新聞事業を構想し、借金をして国民新聞社を設立しました。その借金の保証人が新島襄でした。

このように大変華々しい出発でした。明治維新で混迷していた日本の「これから」を示した『将来之日本』はベストセラーになり、蘇峰の民友社には共鳴した青年たちが集まってきました。世間は、福沢諭吉の次世代のオピニオンリーダーが現れたと騒ぎました。蘇峰が25歳頃のことでした。『国民之友』は、当時としては破格の読者数を集め、『国民新聞』も世論指導力を発揮しました。良い意味でも悪い意味でも、戦前の日本で非常に長い間、最も影響力を持っていたジャーナリストが蘇峰です。

次は、政界の裏方として世論操作をした蘇峰です。彼は松方内閣（薩摩閣）の勅任参事官になりました。今まで民間から藩閥批判発言をしていた蘇峰にとって、これは大転身です。変節漢と呼ばれて『国民之友』の売れ行きが突然落ち、廃刊に追い込まれるほどの出来事でした。

特に関係が深かったのは桂内閣です。蘇峰は桂の懐刀となり、閣外から『国民新聞』を通じて支援し、大変な影響力を

柳沢家、水戸家などから幕末の貴重な史料をたくさん借りて読み、自分の思うところを自由に書いた。それが面白いんだと自身で語っています。この「自由に」というところが蘇峰の特徴です。

蘇峰ほど他人から牽制されず、自分の思うことを自由に書くことができた人はいません。そういう意味では「大市民」と言っている生涯を送った人です。自分で新聞社を立ち上げたベンチャー起業家だからこそ、自由の境地において仕事ができただけ。そこに注目をしていただきたいのです。

ですが、一度だけ、蘇峰にも自由に書けない時期がありました。国民新聞社が関東大震災に遭って本社を建て替える金がなく、東武鉄道を経営する根津嘉一郎に300万円を出してもらい、根津の傘下に納まった時です。雇われ者として干渉されながら文章を書く。そのとき蘇峰は自分の言いたいことが自由に言えないという経験を初めてしました。そこで国民新聞社を手放し、修史家として立ちます。その後、大阪毎日新聞社社員のポストを得て自由にコラムを書き続けます。

### 蘇峰の言論活動の原点

彼はなぜ文章を書いたのか。反骨精神であったと還暦を前に蘇峰は言っています（『中央公論』大正12年1月）。当時は、ワシントン海軍軍縮条約などが結ばれた直後です。蘇峰の反抗の対象は白人閥でした。彼は農家の出身でしたので、まず士族閥に反抗し、同志社では宣教師閥に反抗しました。彼にはJ.S.ミルを読む英語力がありながら、「英語の同志社」では英語コンプレックス、反感を持っていました。初期民友社では藩閥批判、そして支那閥、露西亜閥に反抗する日清・日露戦争を経験してワシントン体制以降は白閥退治を唱えます。このような反抗精神が、ジャーナリズムにおける基本的な立ち位置でした。

蘇峰は最初、非常に鮮明な平民主義者として出発しました。その後帝国主義者になり、日露戦争の頃から皇室中心主義を言い出します。『蘇峰自伝』という面白い本があります。少年時代、自己形成に非常に大きな影響を及ぼしたのは兼坂塾であったと言っています。蘇峰は文久3（1863）年に庄屋の息子として

生まれ、元田塾、竹崎塾を経て明治4（1871）年に兼坂塾に入ります。この兼坂諄次郎は熊本藩でも比較的上位の武士でしたが、明治維新で士族身分を捨てて農業を始め、塾を開いて新しい文明をどんどん取り入れていきました。少年蘇峰、つまり猪一郎はこの塾に住み込み、日々労働するということを身をもって学びます。そして、自分は労働しないのに人々の上に立つ士族を痛烈に批判しました。よく彼は「士族根性」という言葉を使い、それに対して自分は「平民主義者」であると言いました。蘇峰の「平民主義」という言葉には、明らかに士族社会に対する抵抗意識があります。平民主義とは実はデモクラシーの訳語ですが、「民主」というと皇室と結びつかなくなるので「平民」という言葉を使ったと後年、言っています。

そういう彼の考えを盛り込んだのが『新日本之青年』であり『将来之日本』でした。徳川社会で一番偉かったのは將軍でも大名でもなく、実は「習慣」だったのだと彼は言います。これはJ.S.ミルの『自由論』の中の言説です。蘇峰は呼びかけました、皆が伝統習慣に支配

され、それに従って暮らしていた。そこから人間を解放するのだ、新しい歴史を作るのは、無名の明治の青年たちだ、天保の老人はもう時代遅れだ、と。蘇峰はそれを『新日本之青年』の中で「天真爛漫の青年」と書いています。蘇峰自身が「天真爛漫の青年」として生きた人です。「力の福音」との出合いから  
皇室中心主義へ

次に彼が期待したのは「中等社会」です。上流も下流もいけない。自ら労働する人による社会こそが日本を作る、経済によって平和的競争時代になるのだと。

これはマンチェスター・スクールというイギリスの経済学の影響を受けています。しかし、それはうまくいきませんでした。既に明治24（1891）年に蘇峰は「中等社会の墮落」という論説を発表しています。松方デフレの影響から地主層は分解し、一部の不在地主と、多くの小作に分かれていきました。金が集まった地主は投機活動を起こし、落ちぶれた者は一攫千金を目指し、社会のモラルは失われていきました。新しい日本の基軸として、蘇峰はキリ

に対抗意識を見せていた蘇峰が薩摩閥に協力するようになり、官僚になったのです。

その後桂の死によって政治から離れ、文筆業に戻った蘇峰は大正5（1916）年に『大正の青年と帝国の前途』を出版しました。『将来之日本』『新日本之青年』を根本的に改作したもので、1200版以上を重ね、100万部以上売れた。蘇峰の物で一番売れた本です。この本の中で彼は青年たちに、自由主義の立場や自己中心主義を捨て、挙国一致でもっと国家に協力しなさいと言いはじめました。ここで明らかに路線が変わりました。

しかし翌年の大正6年、蘇峰は『杜甫と彌耳敦』を出しました。『大正の青年と帝国の前途』とは傾向の違う2冊を同時期に出版したわけですが、『大正の青年と帝国の前途』は国民世論指導用の著作で、帝国主義論、皇室中心主義を主張する集大成でした。『杜甫と彌耳敦』では積年の信条を綴っています。自分の本命の気持ちです。ミルトンは、イギリス革命の時に国王を殺して共和制にしたクロムウェルの秘書だった人物です。共和主義者ミルトン、キリスト者新島襄を日本

のミルトンとみなした、彼の価値観を書いています。しかしそれは国民一般向けの発言とは明らかに分離していました。本心が二つに割れていたと言えると思います。この姿勢は問題です。

昭和14（1939）年には『昭和国民読本』を書きました。神話時代からの天皇の話です。日本が丸となって世界に皇道を広げていくんだと、コミニュタリアニズムのようなことを書いています。

昭和11年に蘇峰は、日清戦争以前に書いたものは大目に見てほしいと語っています。当時は若気の至りで、藩閥を攻撃さえすれば日本国民としての義務をまっとうしたと思っていた。でも三国干渉に出合っただけで考えが変わったのだと。昭和15年、神兵隊事件の第96回公判で、蘇峰は右傾化した首謀者たちの証人として陳述します。その中で、自身が明治維新の自由主義教育、あるいは同志社の自由主義の影響を受けたことは認めています。その上で、自由主義からヘトヘトになりながら皇室中心主義になった、と言っています。ある種の本音だと思えます。

スト教に期待しましたが、すぐにあきらめました。彼等は自分の魂の救済しか考えていません。社会、国家のことを考えていませんでした。蘇峰は近代革命期に政治家になったミルトンやクロムウェルのようなクリスチャンを期待していたのに、そういう人物が日本にはいないと言っただけでキリスト者に失望しました（新島先生は例外）。明治20年代の中頃です。

蘇峰の意見が変わったのは日清戦争の後です。日本は下関講和で割譲を受けた遼東半島を、三国干渉によって返さざるを得なくなりました。道理が通っていても、力を持っていないければ何も役に立たない力を持っていると無道理であっても通用するという事実、彼はこれを「力の福音」の洗礼を受けたのだと言いました。

そこから彼は日本を、力のある国にしなければいけないと言い出しました。産業で平和にやっていると云っていた路線が、ここで大きく変わったのです。明治29年5月から翌年7月まで、蘇峰は英語に堪能な深井英五を連れてヨーロッパ、アメリカを周り、世界を視察します。そして帰国直後、松方内閣の内務省助任参事官に就任しました。今まで藩閥や士族

#### 皇室中心主義と平民主義との融合

このように蘇峰の立ち位置は時代とともに変わっていきました。少しまとめてみますと、彼は「平民主義」という旗はずつと降ろしません。しかしそれを皇室中心主義と重ねていきます。「平民主義」と今後の政治「中央公論」明治41年3月ではこう言います。「いうまでもなく我帝国は古来より平民主義の最も行われたる国である。歴史の上には階級もあり、豪族もあれども詮ずる所は上に一君万乗の天皇を戴き、下には万民皆同朋であると云う観念は殆ど我歴史の初めより今日迄を一貫したる大主脳にして維新の改革も畢竟此方向に動いたものに外ならぬのである。言い換うれば我が国に於ける尊王主義は平民主義の父母である」。そして、デモクラシーは国民の支持がないといけない、帝国主義も国民の支持がないから、平民主義と帝国主義は兄弟なんだと言います。

皇室中心主義を平民主義とつなげて語るのには、いくつかの理由があったと思います。一つは、デモクラシーの落とし穴を蘇峰がよく知っていたということだ

す。丸山眞男は『日本の思想』の中で、「精神的貴族主義」と言っています。多数者の意思におもねっていると、行き着くところ、易きにつく。視聴率至上主義の今のテレビの低俗化と同じです。だから良い意味での精神的貴族主義とデモクラシーを組み合わせないと、民主主義はとんでもないところへ行ってしまう。蘇峰も初めはキリスト教と平民主義を組み合わせようとしたが、無力を悟りました。そこでおそらく、日本でモラルを代表するのは皇室であるということ、両者を結びつけたのだと思います。

『国民教育論』で彼は、天皇制を持つてくることで日本国民のモラルは維持できるのだと言っています。同じ本では、責任の観念、自主の精神、公共心を養うことが大事であるとも言っています。こういうところに明治時代の蘇峰のリベラルな面が残っています。服従だけのモラル観ではないのです。

一君万民とか皇室中心というと、もう一つ、つながるのは「天皇親政」です。これは軍部の中で皇道派が唱えた考え方です。まさに美濃部の天皇機関説批判、天皇親政論に蘇峰は近づいていきます。

そして神兵隊事件の証人となり、議会主義や政党政治について批判しました。こういうふうに変右傾化していったのである。

### 新島襄との関係

新島襄との関係をお話しておきます。蘇峰がまず新島から影響を受けたのは、彼の人格主義でした。新島は「キヤラクター」という言葉を多用します。これは新島がアメリカにいた頃の時代背景と関係します。科学の台頭によって、キリスト教が世俗化していき、聖書中心主義に対して人々が懐疑的になっていった。人格教育が盛んに言われ始めた時代です。

『蘇峰自伝』で彼はこう言っています。「同志社に於いては、予は人格主義の何者たる乎を体得したる心持がした。…人間の生活は畢竟、高尚なる奉仕の爲にするものであり、人間の価値は奉仕する心の純潔と熱情とに依つて、定まるものである」と云ふ事を教えたのは、新島先生である。人生は目的を持って生きないといけない。蘇峰は同志社時代にどんな目的を見つけたか、それがジャーナリストになることでした。蘇峰はむしろ同志社

を退学してから新島と意気投合します。

新島もまたボストンでアメリカの市民社会を経験してきた人です。ある時新島は、蘇峰に宛てた手紙にこんなことを書いています。「君二ハ政治上ノ平民主義ヲ取ルモノニシテ、僕ハ宗教上ノ平民主義ヲ取ルモノナレハ、ツマリ平民主義ノ旅連レナリ」。新島は会衆派教会に属していました。会衆派は信徒がみな平等にものを言い、最後は多数決で決めます。まさに宗教上の平民主義です。そこで二人は共鳴し合い、助け合っています。

それが一番はつきりするのが「同志社大学設立の旨意」です。その中で蘇峰は、軍隊式の師範学校を作った明治政府を「国家の奴隷を作っている」と批判します。これでは意志の弱い人物しか生み出さない。むしろ独自一個の見識を備え、良心を手腕に行動する独立自由人をつくる、天真爛漫の青年を育てるのだ。それは私学しかないのだと。ここで新島と蘇峰は共同歩調を取りました。

そのような2人の間で違っていたのは宗教観でした。蘇峰は、日本人にとつてはナシヨナリズムが宗教になっているのだと言います。準戦時体制下の昭和10年、非常に健康に生きていました。したがって、非難された文章もスクラップ帳に保存して、五百年後の評価を待つ、と胸をはります。多くの識者が「実は本心は△△だった」と、以前の自己欺瞞発言を弁明する態度とは対照的なのです。

これが現代とどうつながるか。「上野先生、勝手に死なれちゃ困ります」（光文社新書）という面白い本があります。上野千鶴子さんと教え子の古市憲寿さんという2人の社会学者による、世代間闘争の対話を書いたものです。上野千鶴子は現代の青年たちに、もっと元氣を出せ、一人ひとりが事業主になりなさいと忠告しています。戦後の高度成長で中流階級意識が九割となり、『将来之日本』で描いた夢に近づきました。しかしまだ個人は「社畜」にすぎず、しかも中流が二極分解しつつある現代において、自分が自分の主人公でありつづけた蘇峰の生き方と、上野千鶴子の起業家になって自立しなさい、百姓（ひやくせい）社会を作りなさいという言い方は、共通しているのではないかと思えます。

（6月11日、今出川校地良心館103番教室）



同志社大学創立60周年記念の演説でもこのように言います。自分の皇室中心主義に対して、新島先生はまだそこまで行き着いていない。もし先生が生きておられたら、蘇峰の考えは新島先生の考えを受け継いだものだと先生はおっしゃるであろうと。新島の愛国心や皇室観を自分の唱える日本精神に近づけて、かなり自分勝手な解釈をしました。新島は愛国者でしたが、

新島が愛したのは民です。民を愛することによって国を愛した。この蘇峰の発言を聞いて、新島原理主義者ともいえる安中教会の牧師柏木義円は、「蘇峰は墮落した」と言いました。

戦後はどうなったか。蘇峰は敗戦にがつくりします。すべての役職、文化勲章や官位も返納し、戦争責任を取って隠居しました。昭和20年10月12日の日記に彼の和歌があります。「此頃ハ逢ヒタイ人ノ多ケレド 別ケテ逢ヒタイ新島先生」。

### 蘇峰に学ぶ自立のすすめ

戦争が終わり、蘇峰の書いた文章に煽られて戦地へ行った青年たちは、蘇峰に幻滅していました。戦後は『将来之日本』『新日本之青年』だけが評価され、戦犯扱いをされてきました。しかし最近はまだ風向が変わって、右傾化した頃の蘇峰を再評価する軽薄な動きが出てきました。

蘇峰自身はどう自己分析していたのでしょうか。自分の意見が変化したことは認めるが、自分としてはその時その時の情勢を考えて最善の意見を提示したのだと言います。そこには自分の発言が自己欺瞞でなされた意識はなく、肉面的には